

学会活動の回顧と展望

・1996（平成8）年（8/27・28，東京家政学院大学三番町キャンパス）

テーマ：「21世紀家政学の地平を求めて一部会員全員による地区討議と総合討議」

第1セッション：「外発的要因からみた家政学とその名称」

第2セッション：「内発的要因からみた家政学とその名称」

第3セッション：「21世紀日本家政学の存在理由と今後の課題」

・1997（平成9）年（8/28・29，昭和女子大学）

研究発表：明治初期における翻訳家政書研究の課題（谷口彩子），明治期高等女学校家事科教科書における食事の共有と団欒（表 真美），学会誌分析と大学の動向からみたアメリカ家政学の現状（増田啓子），家政学に必要な実践的目標と使命感について（古寺 浩）

若手研究者によるシンポジウム：「原論への問いかけを聞く一過去から，海外から一」

この他，研究発表7件，国際会議報告4件，部会報掲載論文・資料・ノート等は16件となっている。

3. 今後の展望と課題

家政学という名称が学部・学科名称をはじめとする多様な局面でますます用いられなくなることが予想される。アメリカにおける1960年以降にみられた状況に相応するものといえよう。アメリカが，約30年に及ぶ時を経てスコッツデール会議（1993）で再び名称の統一を図ったように，日本においてもやがてこのプロフェッションの名称について何らかの対応を必要とする時期を迎えるかもしれない。

部会は，そうした事態をも考慮に入れながら時代の変化に対応したわれわれのプロフェッションのあり様を求めて困難ではあるけれども真摯な努力を重ねていかなければならないと思う。

（文責：村尾勇之）

被服材料学部会

1. はじめに

本部会は，1969年に発足した被服材料学研究委員会を基とし，その後部会となり29年目を迎えている。委員会・部会の成立過程や変遷および活動等について，30周年記念特集号に山田都一部会長（当時），40周年記念特集号に丹羽雅子部会長（当時）が詳細に述べられているので，ここでは，その後10年間の活動等について述べる。

本部会は発足当初から毎年開催している夏季セミナー，1983年から発行している部会報，各地区で開催している講演会・見学会，および科学研究費の申請の四つを大きな活動の場としている。現在（1997年）部会員数は100名で，会員全員で部会の企画・運営を行っている。また，部会長は2年任期で交替し，この10年間（1988～1997年）の部会長は丹羽雅子，弓削 治，成瀬信子，北田総雄（故人），川股 浩，日下部信幸が務めた。

2. 部会研究活動

(1) 被服材料学夏季セミナーの内容（○：実行委員長）

1) 第20回，大津市・いこいの村びわ湖（1988，7/27～29，○弓削 治）

① 被服繊維の吸湿性（河合弘廸），② 衣服・寝具の

機能特性の定量化（武田俊一），③ 琵琶湖の環境と私達の生活（鈴木紀雄），④ 家庭科教育と被服材料（日下部信幸），⑤ 被服材料の基本的熱特性について（藤本尊子），⑥ 高機能性高分子材料（沢渡千枝），⑦ 縫いに見られる諸問題と対応策（明石淳子），⑧ 衣服設計のための人体形状モデリング（黒川隆夫），⑨ 見学会：東洋紡総合研究所等。

2) 第21回，佐渡・ホテル吾妻（1989，7/27～29，○西沢 信）

① アメリカの被服学事情（安田 武），② 最近の被服学の動向（成瀬信子），③ 最近の繊維製品の新素材・新加工方法について（後藤徳樹），④ 感覚計測と製品設計（原田隆司），⑤ 客観的性能評価に基づく衣服設計（諸岡晴美），⑥ 本縫いミシンにおける縫い目状態の評価（高木 直），⑦ 着用状態時の衣服縫い目に加わる張力（宮内秀和），⑧ 新潟県の降・積雪環境と暮し（和泉 薫），⑨ 佐渡の織物誌（佐藤利夫），⑩ 見学会：技能伝承館等。

3) 第22回，郡山市・磐梯熱海温泉栄楽館（1990，7/26～28，○川股 浩）

① 生活文化から見た被服への提言（川添 登），② 被服分野の有用な研究とは（風間 健），③ 絹の過去，現代，未来（塚田益裕），④ 運動生理学から見た温熱

環境 (丹羽健市), ⑤ 被服材料の粘弾性の性質について (鋤柄佐千子), ⑥ 画像解析装置によるニットの變形の測定 (菊地直子), ⑦ 導電性高分子 (SN)_x の合成と物性 (金澤 等), ⑧ 磐梯山周辺の自然 (鈴木敬治), ⑨ 見学会: 野口英世記念館, 縫製工場等.

4) 第 23 回, 松本市・浅間温泉みやま荘 (1991, 7/29~31, ○高橋和雄)

① 新品種綿花“超綿”生産とその開発コンセプト (田中雄平), ② 最近の衣料用ポリエステル繊維—新合繊とその技術 (高橋 洋), ③ 婦人服の形態把握法と布の力学的特性に基づく衣服設計 (綾田雅子), ④ 消臭による快適な衣服環境の実現—含銅アクリル繊維 (仲西 正), ⑤ 衣服用革の性状 (角田由美子), ⑥ 人体の機能—血 flow の循環統御様式の特徴— (大橋俊夫), ⑦ 人体の機能—感覚と大脳生理のメカニズム (谷島一喜), ⑧ 被服学における教育・研究の総合化へのアプローチ (司会: 島崎恒蔵, パネラー: 丹羽雅子, 阿部幸子, 大野静枝, 中保淑子, 小林茂雄), ⑨ 信州の自然 (吉田利男), ⑩ 見学会: 近藤紡績 (株), 篠山美術館等.

5) 第 24 回, 柳川市・柳川かんぽ保養センター (1992, 7/29~31, ○甲斐惟幸)

① 高分子物性の上手な使い方 (梶山千里), ② 仏教法衣の構成について (保刈禎子), ③ セルロース繊維技術と新素材 (西山和成), ④ わが国アパレル産業の発展と被服素材の変遷 (正井潤三), ⑤ 有明海の生物について (山口隆男), ⑥ 当社のポリエステル, アクリルの独自商品 (近藤義和), ⑦ 被服素材に及ぼす溶剤・力学的変形の影響 (竹田 弘), ⑧ 柳川の歴史について (北島清恵), ⑨ 見学会: 石橋美術館, 吉島敷物機場等.

6) 第 25 回, 伊勢市・三重厚生年金休暇センター (1993, 7/28~30, ○日下部信幸)

① 最近 50 年間の社会の変遷と被服材料学 (山田都一), ② 被服に関連する地球環境の過去, 現在そして未来 (北野 康), ③ 進化する化学繊維 (山崎義一), ④ 被服等の保存環境 (水谷章夫), ⑤ 衣服内環境—衣服の通気性— (都竹初穂), ⑥ 被服の廃棄, 実態と意識—資源の有効な利用のために (小林茂雄), ⑦ 被服材料学を考える—私の提案— (島崎恒蔵, 筒井由紀子, 川口英樹), ⑧ 見学会: 伊勢神宮, 網勘製網, アサヒタオル等.

7) 第 26 回, 芦原町・芦原パストラル青雲閣 (1994, 7/29~31, ○弓削 治)

① ファッション・トレンドと時代背景 (柳橋達生), ② 結城秀康と松平忠直 (隼田嘉彦), ③ コンバーク化する日本の染色工場 (金谷義博), ④ 生地要因が衣服の視覚判定に及ぼす影響 (磯井佳子), ⑤ 繊維集合体の圧縮特性について (松平光男), ⑥ 新合繊の縫製技術 (石川 昇), ⑦ 繊維素繊維 (テンセル) について (小林伸吉), ⑧ 被服材料学を考える (PART II) (中島利誠, 丹羽雅子), ⑨ 見学会: セーレン (株) 工場, 越前竹人形等.

8) 第 27 回 (被服学関係部会合同夏季セミナー), 修善寺・ラフォーレ修善寺 (1995, 8/23~25, ○酒井豊子)

① 感覚・ストレスと自律神経 (佐藤昭夫), ② 服飾分化と社会 (多田道太郎), ③ これからの被服教育を考える (田村照子, 安田 武, 滝山桂子, 恵美和昭), ④ 今後の被服教育はどうあるべきか (阿部幸子, 島崎恒蔵, 杉原黎子, 城島栄一郎, 松山容子, 登倉尋実, 藤原康晴, 相川佳代子), ⑤ 1/f ゆらぎ応用製品の展開について (村岡和美), ⑥ 合成繊維の出来るまで (福原基忠), ⑦ 見学会: 東レ三島工場.

9) 第 28 回, 花巻市・志戸平温泉ホテル志戸平 (1996, 7/30~8/1, ○吉田清一郎)

① 繊維ファッション産業の現状と将来 (内田盛也), ② 岩手の風土と宮沢賢治 (牧野立雄), ③ ケラチン繊維の最近の研究動向について (伊藤 啓), ④ 中学・高校の家庭科から見た被服教育 (高津律子), ⑤ 綿を中心としたセルロース系繊維のセルラーゼ処理と染色性 (羽賀敏雄), ⑥ 着衣の快適性に関わる布素材の水分移動特性 (薩本弥生), ⑦ 岩手県におけるホームスパン産業の現状と将来 (佐々木陽), ⑧ 気候調節と健康 (渡辺孝男), ⑨ 見学会: 日本ホームスパン, 宮沢賢治記念館等.

10) 第 29 回, 倉敷市・倉敷アイビースクエア (1997, 7/29~31, ○山田都一)

① 倉敷の文化—大原二代と倉敷の文化— (原 道彦), ② 成熟産業の研究開発 (安井昭夫), ③ 被服材料学の最近の研究動向 (丹羽雅子), ④ 被服用新素材の開発 (山口新司), ⑤ アパレルの今まで, 今, これから (佐々木雄大), ⑥ 被服構成学の研究動向と JIS サイズ規格 (三吉満智子), ⑦ 被服整理学の最近の研究動向と被服材料学研究への期待 (杉原黎子), ⑧ 被服衛生学の最近の研究動向と被服材料学研究への提言 (平田耕造), ⑨ 流通業界における繊維製品のクレームの実際—PL 法を中心として— (松尾 繁), ⑩ 見

学会活動の回顧と展望

学会：クラレ繊維技術研究所，(株)倉作屋，瀬戸大橋等。

(2) 部会報の主な内容 (○：編集委員長)

第8号 (1988.7, ○松尾 勝)：ハイテク繊維とハイタッチ繊維 (岩崎 錦)，ファッションと素材 (川口英樹)，官能検査と私 (小林茂雄)，消費者問題について (城島栄一郎)，ウォッシュャブル加工衣料についてのアンケート結果 (鈴木 淳)，高吸水性ポリマーについて (宮田奈美子) 等。

第9号 (1989.7, ○矢井田修)：Concurrent items (高橋和雄)，不織布の発展 (矢井田修) 等。

第10号 (1990.7, ○矢井田修)：雪とファッション (諸岡晴美)，家政学情報のデータベース化について (城島栄一郎)，インデックス90 コングレスの概要 (矢井田修) 等。

第11号 (1991.7, ○大野 亮)：被服材料学と化学 (小川昭二郎)，被服材料の教育を考える (高橋和雄) 等。

第12号 (1992.7, ○大野 亮)：被服材料学の教育 (金澤 等)，繊維製品の廃棄後に問題はないのか (川股 浩)，家政学文献データベースと家政学シソーラス (城島栄一郎) 等。

第13号 (1993.7, ○矢井田修)：産業資材用繊維の動向と不織布製造技術 (矢井田修) 等。

第14号 (1994.7, ○矢井田修)：ナイロン，ポリエステルを発明を検証する (大坪 敏)，繊維技術者育成のための教育を (弓削 治) 等。

第15号 (1995.7, ○西沢 信)：布の圧縮特性3段階分割方法の紹介 (松平光男)，被服材料学の講義に最新の被服材料を使う (竹田 弘) 等。

第16号 (1996.7, ○西沢 信)：短期大学被服科における被服材料分野担当として考える (浅利 侑)，小学校における被服材料学習の一例 (清水裕子)，最近表面がおもしろい (牛腸ヒロミ) 等。

第17号 (1997.7, ○安藤文子)：インターネットでキャッチするアパレル材料情報 (團野哲也)，生活科学の中の被服材料学 (桑原宣彰) 等。

(3) 講演会・見学会 (地区開催)

1988.3.10 (中部)：ファンシーヤーンについての講演とファンシーヤーン工場見学，9.9 (東北・北海道)：最近の北海道における毛皮製品の特性とその問題の講演と旭一サンシャイン工業(株)ミンク飼育場見学。

1989.3.24 (中部)：小原和紙と大正村資料館見学，

9.21 (東北・北海道)：ミシン縫い目に関する研究と植物色素の水溶液からの収着についての講演と飛鳥紋り草木染工房および鈴三ニット工場の見学。

1990.3.8 (中部)：21世紀の繊維産業の講演と岐阜繊維試験場見学，10.5 (東北・北海道)：岩手県におけるホームスパン産業の歩みの講演と日本ホームスパン(株)見学。

1991.3.7 (中部)：飯田紬と水引工芸館の見学，10.4 (東北・北海道)：オーストラリアの繊維事情の講演と松島瑞巖寺特別拝観。

1992.3.5 (中部)：ファッション素材と縫製技術の講演とタキヒヨー被服(株)見学，9.25 (東北・北海道)：機械レースについての講演と笠原工業製糸(株)の見学。

1993.3.10 (中部)：刺しゅう機の現状についての講演と(株)バルダン見学，9.24 (東北・北海道)：つがるこぎんの講演とこぎんの家見学。

1994.3.4 (中部)：シートファブリックについての講演と豊田紡織(株)大口工場見学，9.30 (東北・北海道)：バイオテクノロジーの応用の講演と生物工学研究所見学。

1995.3.11 (中部)：レザー・ガーメントについての講演とレザー・ファー工場見学，9.8 (東北・北海道)：生体内熱移動の数値モデル化と被服研究の重要性の講演と北大農学部附属植物園見学。

1996.3.15 (中部)：アパレルのものの作りと生地特性をもとにした縫製条件の講演とマルタンファッション・ガーメント(株)見学，9.27 (東北・北海道)：羊の飼育とウールの講演と小岩井農場まきば園見学。

(4) 科学研究費

1989年度総合研究A「被服設計の体系化のための材料学的基礎研究」(研究代表者：丹羽雅子，研究組織：中島，酒井，弓削，藤本，大坪，宮内，小林，日下部，岩崎，鋤柄，筒井，与倉，松生)。

3. 現状と今後の展望

被服材料学は被服学の基盤となる重要な研究分野でありながら，近年は日本家政学会総会での研究発表の件数や学会誌掲載論文数が減少している。論文数を見ても，掲載総数は毎年80～100編であり，被服学領域は10年くらい前までは約40編 (うち被服材料学関係は10編以上) あったが，近年は被服全体で約20編 (うち被服材料学関係は数編) と減少している。この原因は，被服材料学に関係する論文が他の学会誌 (繊維学会誌，繊維製品消費科学誌，繊維機械学会誌，

衣服学会誌等)に流れていることや、広分野での研究が行われているためとも考えられるが、被服材料学の発展のためには、本誌に掲載数を増やしていくことが大きな課題である。

今日、被服材料は高品質、高性能、高感性、快適性などが重視され、これらの開発・研究が行われているが、今後は環境やゴミ問題なども考慮した被服材料を

追究していくことも必要である。例えば、過精練、過漂白、過加工されたものより、素材をそのまま生かし、なるべくエネルギーを使用しないで造られる被服材料や、3R(リフレッシュ、リフォーム、リサイクル)を考慮した被服材料を研究していくことが地球環境を守っていく上で重要な課題である。

(文責：日下部信幸)

被服構成学部会

1. はじめに

被服構成学部会は、1998年に部会創立20周年を迎え、毎年発行の部会誌の20号は記念特集号の編纂予定である。正に、回顧と展望の絶好の機会であるといえよう。

今回の記録は、1988(昭和63)年から現在までの10年間となっているが、この源流は、被服構成学研究委員会設立の1969(昭和44)年に遡り、以後10年間の充実した活動記録が「家政学雑誌」Vol. 30, No. 1(1979)に残されている。そして、この年には被服構成学部会として新しく発足し、会員の共同研究や相互の切磋琢磨の場としての部会事業はますます発展して会員数は293名に達している。この間の活動記録は「日本家政学会誌 Vol. 39, No. 5 (1988)に40周年記念特集号として掲載されているので、いずれも参照されたい。

この先達の志を受け継ぎ、多くの会員の被服構成学に対する熱意と協力によって、現在までの部会活動は揺ぎないものとなった。しかし、家政学部・学科の名称変更、授業科目名や時間数の変更等は、被服の設計・製作を教育する被服構成学部会の大きな検討課題であった。この期の各部会長(1988・89 京都女子大学の故山名信子、1990・91 文化女子大学三吉満智子、1992・93 甲南女子大学木岡悦子、1994・95 大妻女子大学松山容子、1996・97 椋山女学園大学中保淑子、1988～広島大学林 隆子)はこのことに心を砕き、シンポジウムあるいはフォーラムを開催して被服構成学の問題点やあるべき姿を会員とともに模索し、部会としての自己点検・評価を行ってきた。会員数は259名(1979.3.31現在)でうち20名が運営委員である。

2. 部会活動の回顧

(1) 共同研究と報告書作成

1) 「既製衣料サイズ表示と購入の実態に関する研究報告書」1991.1

日本家政学会消費者問題常置委員会から1986年に消費者問題について協力要請を受け、部会員全員による共同研究として、既製衣料における「表示に関する消費者の関心度ならびに身体への適正度」について、10歳代から60歳代までの性別・年代別を対象に基本的事項を調査した。

2) 「乳幼児衣料の表示と着衣の実態研究報告書」1993.3

日本家政学会消費者問題常置委員会は、1990・91年度文部省科学研究費補助金(総合研究A)交付研究課題「消費者問題としての『表示』に関する家政学的研究」のうちの衣生活関係の1部門を被服構成学部会に委託し、当部会では「乳幼児衣料の『表示』にかかわる諸問題」を担当した。第2回目の共同研究として全国的にアンケート調査を実施し、さらに、乳幼児衣服の着衣実態、市場調査を行い、3年間を費やして標記報告書を刊行した。

3) 「被服構成学に関する教育の試み」1994.1

被服構成学分野における研究領域、教育内容について社会の変化と要請を視野に入れたディスカスを常に部会活動として行ってきた集大成として、教育実践の立場から授業内容の現状分析、自己点検から改革への試みの具体例をまとめ、多様で個性的かつ人間形成を目指す被服構成学教育の参考資料とした。

(2) パソコン講習会

被服構成学の研究および授業に活用できるCG, CAD, Lotusの基礎と応用についての講習会を1992・94年の2期にわたり、大妻女子大学情報処理教室にて開催した。講師は部会員が担当し、部会員による部